
魔法少女リリカルなのは Setsuna's Story

結城葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Set suna's Story

【Nコード】

N2008S

【作者名】

結城葵

【あらすじ】

翡翠刹那は死んだ……らしい。彼女にはあまり実感はないが。どうも神様がテンプレートにもどこぞに転生させてくれるらしい。正直どうでもいい、と思っていたら、どうもそこは「魔法少女リリカルなのは」の世界なんだとか。刹那はちょっとばかりチートな物を貰ってなのはの世界につ！

前書き + 宣伝ですよー（前書き）

……序章終了後にやろうと思っていたこのシリーズ。終わってないのに始めちゃった……。

更新はワルクラの合間にやるので、かなり遅いと思います！ 大声で言うことじゃないですけどね。

ガールズラブ、いわゆる百合は出るか分かりません。多分出ると思います……。

では、始まります。

前書き+宣伝ですよー

初めまして。私、どこぞの国ではセイヴァーなんて呼ばれ方をしているらしい都市国日本を守護する第一部隊。日本政府直属特別特務守護部隊『十二師団』の7thをやらせていただいているレン・バレッタです。

えー、「それってなんだよ意味分かんねーよ!」という方は、私の所属する十二師団がその内での『ワールド・クライシス!』を読んでください。まだ序章の現在、一瞬だけ十二師団の名前が出ていますから。ええ、ええ当然ただの告知というか宣伝ですよそれが何か? 良いじゃないですか! こうやって宣伝したおかげでワルクラ(当然ワールド・クライシス!の略称ですよ?)を読む方が増えたら、作者の結城葵さんのやる気が出て更新速度がアップするかもしれないじゃないですか! そしたら私が少しでも速く出られるじゃないですか!! こうやってここだけしか出られないのは空しいんですよー!!!!

はあ……まあいいです。

とにかくにもそんな話は置いてですね。この『レン・バレッタの妄想二次創作その〜です! (Renne of Delusion Second 略してRODS)』シリーズは、何度も名乗りますが私、レン・バレッタの二次創作です。まあ名前の通りですね。ワルクラが進む中、ひっそりとこつちが暇を見て進んでいく訳ですよ。私も十二師団としての仕事があるんで更新はかなり遅めでしょうけどねー。

二次創作で出るキャラクター、ていうか主人公は主に私か、結城葵さんが考えてる別作品の主人公とかが持ち出されます。だからこのシリーズで出てくる主人公とかは、新しいオリジナル小説に出てくるかもしれない訳です。能力とかは別にしてですが。

あ、ぶっちゃけちゃいますと、このシリーズは基本プロットとか

多分ないと思うので……。ぐだぐだな展開だったりしても、怒らないでくれると嬉しいですよー」

えーっと、他に何かあったっけ。

あ、そうそう。言うまでもない、というか私の解釈なので正しいとは言いませんが、このシリーズでやる二次創作する原作の作品のキャラとかですけどね。私的解釈だったり、こんな感じだったよねー、っていう風に台詞は喋らせるので、悪口とかクレーム(?)は無視しますから。あ、でも、「いやいや、このキャラはこういう喋り方だよ?」とか、「このキャラはさすがに性格違い過ぎじゃない? もっとこんな感じだと思うよ」っていうのは大喜びして御受けいたします。

まあ、なんにしても先に謝りますが……。

このシリーズで二次創作する原作のキャラのファンの皆さん、本当に、申し訳ございませんッ!!

そこまでキャラのイメージが壊れそうな感じにするつもりはないですが、一応イメージなんて人それぞれなので謝っておきます。

ふう……。喋ったー。ここまで長々と喋るのは日常生活じゃなかったありませんからねー。仕事だとあるんですが。

あ、ちなみにかなり今更ですけど、私、レン・バレッタのことに關しては、『ワールド・クライシス!』で出てくるのを待ってくださーいねー。ここでは自己紹介とかしませんし、シリーズの中に出て、ぜんっぜん性格も能力も何もかも違うので、シリーズ内の『レン・バレッタ』を見て、「ワルクラのレンとこっちのレン全然違うんだけどどうしたことだよー!」とか言わないでくださいね? ちゃんと注意はしました。もし言っただら、これを読め、と叫びますのでご注意を。

ではでは。もう一三〇〇文字は突破しました。

この辺りで、「前書き+宣伝ですよー」を終了します。

あ、「終了します」の辺りで一四〇〇文字突破しました。
どうでもいいですけどねっ」

b y 十二師団 7 t h レン・バレッタ

第一話「テンプレート」……だね by 刹那（前書き）

……ていうか今考えたら、私詳しい設定とかはあまり知らない……。
詳しい方々！ どうか怒らないでください……。

第一話「テンプレート……だね by 刹那」

どこぞの名家のお嬢様、ひいろせつな 翡翠 刹那。三歳の頃に戦闘技術の基礎を教わり、同じ歳に、犯罪者二〇〇〇人のいる孤島に放り込まれて生きるための技術を無理矢理叩き込まれ、四歳の時には、その技術を使い、どのくらいだと殺して、どのくらいだと殺さなくて済むかを叩き込まれるという、バカみたいな教育を施された少女である。そんな少女は今。

神様の目の前にいる。

現在の年齢約一四歳。現在中学二年生、中頃。
どうも彼女は死んだらしい。

……さて、そろそろ三人称まがいの語り方はやめよう……。
一応、さっきから語ってたのはその本人、私、翡翠刹那ですよ……。

とりあえず話を戻して。私が死んだらしいのだけど――、

「まあ……どうでもいい」

「ええっ!? 自分が死んだのにどうでも良いの!？」

「……そう言えるくらいの人生だったから」

「うわぁ……」

さっきも言ったけど。この私の前にいる女の人は神様らしい。聞いた所によると、一応女神の位置づけをされていた、北欧神話のヘルさん。ファザコンな神様です。

……いや、神様には失礼なんだろうけど。

「それに……スperl・マジシャンとワード・マジシャンの戦争は飽きた」

「あー、まあそんな歳であんな戦争に巻き込まれてたら嫌だよねえ」
理解出来ない人は、いつか出るかもしれない（出るかは分からない

い)『スペル・マジック!』を読んで。いつ出るかなんて私は知らないけど。

「えーっと、とにかくとにかく! 貴女は本当は死ぬはずじゃなかったの!」

「……かなりテンプレ」

「良いのっ、テンプレで! だから転生させてあげる! オーディンのクソ親父の許可も貰ったしね!」

「……一応最高神」

「い・い・の! 私を兄弟二人と一緒にニヴルヘイムなんか追放したあのおっさんが悪いの!」

「気持ちは分かるけど……」

「とにかく! 貴女を転生させるよー、チートとかあげるよー」

「……本当にテンプレ」

まあいいや。平和に暮らせればそれで良いし。このまま天国に行くのも悪くないし。どっちにしても私は平和。……ぶっちゃけあの面倒な戦争から抜け出させてくれた神様には感謝してるといっても過言ではないし。

「で、どこに転生するの……?」

「んー、えつとねー、当選したのは……『魔法少女リリカルなのは』だよー」

「行く絶対行く確実に行くさっさと行かせて」

「え、ええ? なんか凄い変わり様なんですけど……」

実は私。あの戦争の中……あの戦争って言っても分からないね。とにかくいろんな事情な交錯する中、何か心の休み場所が欲しいと思ってる、別に中二病とかではないけど、なのはのシリーズとかその他のゲームを見てたりやってた。ん……フェイトとなのはとはやて可愛い(左から一位、二位、三位)。

「好きな世界なら変わるのは当然……」

「まあそれもそうだねー。じゃあ欲しいチートを御願います」

チート、かぁ……。私もなのはの二次創作書いてみたくて、いろ

いろと『作家を読もう』でなのはの探してみただよね。とりあえずそこで出て来た能力をいろいろと調べたり、それが出てくるアニメやらマンガやらラノベやらを見てみたりしてたから……大体分かるはず。

……私、戦争中だったのに随分とオタクなことしてた。

「……他の設定先に決めちゃダメ？」

「別に良いよ？」

「……じゃあ歳は五歳。確かこの歳くらいが多かったよね……」

「んー、まあそうだね。えーっと、確か無印が九才からだっけ。本編の三、四年くらい前だね」

「ん。容姿は……今のままで良いや。なんか美少女だなんだって、兄さんも騒いでたし、多分不細工ではないと思うから」

ちなみに。私は銀髪の琥珀色の目っていう感じだけど、まあいろいろいじられてる（科学的に）ので、左腕にバルキリー・エッジとかいう意味不明な兵器がつけられてたりするけど、まあなんだかなだであんな状況でも学校行ってるね、告白されたりしてたから、少なくとも不細工ではないと思う。

……自意識過剰とかナルシストとか言った人、あとでバルキリー・エッジ使う。

「確かに可愛いよ刹那ちゃんは。お世辞とかじゃなくて」

「ありがと……。あと、家はなのはの家から歩いて一〇分くらいのところで、お金は高校卒業するまで働かなくても大丈夫くらいちようだい。親とかの設定は前世のを使ってくれと楽」

「確か……両親が刹那ちゃんを産んだ後、そのご両親、つまり刹那ちゃんの祖父母の教育に耐えられずに失踪、刹那ちゃんも連れて行こうと思ったけど祖父母に妨害され、仕方なく諦めた。祖父母は……どうする？ 日本に住まわせる？」

「あの二人達はアメリカにでも住まわせておいて。偽物でも別人でも、その設定を持つてると同じくなのは虫酸が走る」

「凄い言い様……じゃあアメリカの豪邸に住んでる、ってことで。」

で、今はお兄さんと二人暮らし」

「兄さんも失踪扱いでお願い」

「ええー……随分設定変わってない？」

「気にしないで」

「はあ……分かった。じゃあそうする。お兄さんも失踪、っと。そんなものかな？」

「うん。あとはチート方面」

ん……どうするかな。

「とりあえず、インテリジェントデバイスの一つ。あと私の知ってる軌跡シリーズとイースシリーズのキャラ全員分のユニゾンデバイスを授からせて」

「そこを授からせて、って言う辺り優しいよねー」

「微妙に日本語おかしくなった気はするけど。まあいいや、そのユニゾンデバイスは私の成長と共に身長とかが成長したり、何故かSSくらい魔力持ってたなりその他設定ありな超特殊仕様で」

「それはもう魔導師なんじゃないかな……。それで？」

「魔法はなのはの世界のと、軌跡シリーズの動力魔法と、私の世界のが使えるようにしてくれるとありがたい。私の世界のは魔力バカみたいにあつたからいじらなくて良い。そのままにしてくれるば。なのはの方は……とりえあずSSSランクの二倍くらいちょうだい」

「はいはい。次はー？」

「あ、軌跡キャラのレンには、機巧魔アスラ・マキナ神を私が知る限り使えるように出来る？ あ、当然パテルⅡマテルは呼べるようにして」

「前者は出来る。後者は当然出来る。あとは？」

「戦艦ちようだい」

「アースらみたいなの？」

「そう。命名、『背中ネコ号』」

「……乗組員は、リトバスマンバーにしとくね」
「ん」

この女神ヘル……今ので分かるとは思わなかったよ。

「で？　まだあるの？」

「言い忘れてたけど。バルキリー・エッジはとらなくて良い」

「え？　なんで？　あれは……」

「……確かに私が人外の証拠みたいなものだけど、今更にならねると違和感しかない」

「……分かった。っていうか、そのままで良いの？」

「あの魔法はかかったまま。身体のこととは……お母さん達の、変な意味じゃない努力の成果だから……」

「錬金術……ね」

お父さんには種がなかったらしい。だから……正規じゃない方法で私を創った。これに関してはその内語る。

「寿命はちゃんと本来の人間並みに。怪物化は出来なくして、限りなく人間に近い感じに。出来れば、あの魔法の副作用もなくしてほしいんだけど……」

「最後の意外は出来るよ。……残念だけど、最高神の魔法を人間が出来うる限り再現したそれは私ごときじゃ、改変は無理……ごめんね」

「そっか……。じゃあ良いよ。発動させなければ良いんだし」

「……じゃあ、他に何かあれば言って？」

「じゃあ……世界改変の力を下さい」

「いいけど……痛いよ？　神様じゃない人以外がやると、改変の数と規模だけ怪我するから」

「別に良い」

「いいならいいけど……あまり使いすぎないようにね？　あれの発動連発は嫌でしょ？」

「分かってる。あ、これ最後、後で追加する権利とガードスキルちようだい」

「前者は多くても五個までだけど良い？」

「良い。多分余るかそのくらいで収まるから」

「はいはい。じゃあちよつと待ってねー。ピ・ポ・パ・ポ、っと」

なんか、シユン！ とヘルの手にボードが出て来たかと思うと、何かの操作をしだした。

ていうか、今更だけど結構チートだね。私の存在がロストロギア指定されたらどうしよう……。ていうかまずユニゾン陣にその心配が……。

なんて不安を抱えていると、ヘルは操作を終えたらしかった。

「はい。まずはデバイスです。一応、イースVSに出てた名前からとって、ケルンバイターにしてみました」

「レーヴェの剣の名前だ……」

「ちなみに、初期形状はスベル・ロツドの形。刹那ちゃんは杖でよかったよね？ 一応他の形もいれてみたけどさ。他のモードは刹那ちゃんの知ってる軌跡シリーズとイースシリーズのキャラの武器と同数。まあかなり大量だね。多分全部は使わないんじゃないかな」

だろうね。

「ユニゾン陣は、ケルンバイターを通して背中の中ネコ号から呼び出せるよ。ちなみに全員呼ぶことも可能」

「魔力のリミッターとかはかけられる？」

「かけてくれますよー。まあ、後の説明は向こうでケルンバイターに聞いて。マスター登録はもうしてあるからねー」

「あれって私がやらなきゃいけなかったんじゃない？」

「一応女神様だから出来ました」

「ご都合主義、ってこういうのを言うのかな……」

「じゃあ、そろそろ良いかな？」

ガチャリ、といつの間にやらあったドアを開けるヘル。

「……落ちるんじゃないんだ」

「落ちたら地獄だよ？ ここ」

「そう。じゃあ、一応お礼は言っとく。実は故意的に殺して楽しむとしてる、なんてふざけた神様じゃないことを祈っておくから」

「そんなことしたらオーデインの親父に殺されるから……。いやマジで……」

「ん。じゃあ、バイバイ。また会えるかは知らないけど」
「はいはい」 いってらっしゃーい」
私はその扉を通る。すると突然目の前が眩しい光に包まれて――。

* * *

気がつけばどこぞの家の中だった。

どこぞの、というよりはあなたの家ですよ。マスター

「ん？ …… ああ。ケルンか」

ケルン？ なるほど、私の愛称ですか。ケルンバイターだからケルン。まあ妥当ですね

「ん……で、今何時？」

夕方です

「じゃあ……公園に行こう」

公園ですか？

確か、大抵の二次創作だと、公園でなのはが泣いていたはず……。不謹慎ではあるけど、邂逅のチャンスだよ。

とりあえず、友達になってこようと思います。

あ、ちなみにどうでも良い上に今の話に関係ないけど、ケルンは私の首にかけられたネックレス……にぶら下がっている指輪だよ。

「じゃあ……行こう」

と、言う訳で。

なのはの世界での生活が、始まりました。

第一話「テンプレート……だね by 刹那」(後書き)

なのはの知識は、前書きでも言いましたが、そこまで深くないです。

wiki 参考にしたりはしますけど……。

そんなやつが書くな！ という人は、どうぞ別の作品に。

第二話「邂逅したり、します byケルン」（前書き）

喋り方と一人称の感じが違うのは、内面だとぺらぺら喋って、対人とかだとそこまでぺらぺら喋らない子だからだよ？ なーんて、言い訳してみたりして。 byレン・バレッタ

第二話「邂逅したり、します by ケルン」

ケルンの道案内でなのはがいるであろう公園に小走りで向かう。
途中で本当に五歳まで戻った自分を見てちよつと感動した。

そして公園に到着。

……案の定いた。一人の女の子。

栗色の髪をツインテールにして、俯きながらベンチに座っている。
その娘の方から泣き声が聞こえてくるのは、気のせいじゃないはず。
えーっと。とりあえず、話しかけてみよう。

少しばかり緊張しながら彼女に近づいていく。

「……どうしたの？」

「ふえ？」

ふ、と顔を上げた彼女は……どう考えてもなのはでした。

よかった、人違いだったら私恥ずかしい人だよ……。

「いや、なんか泣いてるから……」

「なのはは……ひつく……良い子だから泣いてないよ……」

「……泣きながら言われても説得力ない」

「泣いてないもん……」

む……これで「泣いてる」って返したら、多分リープする……。

「じゃあ泣いてない……。で、なんで一人でこんな所にいるの……？」

「……お父さんがお仕事で怪我しちゃって……入院してるの。それで、お母さんもおねえちゃんもお店とおみまいで忙しくって……お兄ちゃんはずっとこわい顔してるの……。でも……なのはは良い子だから一人でも平気なの……」

……なるほど、何回か読んでてこんな感じの返答が来るとは思ってたけど、予想以上に重い……。ていうかこんな歳の娘がこんなにいろいろ抱え込んでいいのか甚だ疑問なんだけど……。

家庭環境って……大事だね。

「そう……。じゃあ、これはいらないお節介だと思って、迷惑がつて良いから、遊びながら家まで送ってあげる」

「ふえ？」

「ほら、行こ」

「……いいの？」

「良くなかつたら言わない」

すると、なのは急に笑顔になって、

「ありがとう！ あのねあのね！ 私、高町なのはって言うの！

5さいだよ！ おねえちゃんは？」

「私も五歳だからおねえちゃんじゃない。私は翡翠刹那……刹那でいい」

「せつなちゃん？ じゃあなのはのこともなのはで良いの！」

「ん……分かった」

それから私は、なのはと手をつないでなのはの家に向かった。

他愛無い話、好きな物とか好きな食べ物とか、もはや自己紹介の域でしかないことばかりだけど、それでもどこか楽しかったのは、あんまりそんな話をする機械がなかったからかもしれない。前世では、友達と話すのは戦争のことばかりだったから……。

ん……来て良かった。

そうこうしているうちに、なのはの家の前にたどり着いた。

「ここ……？」

「うん！」

言いながら戸を開ける。道場あるからなのか、横に開ける感じの扉だ。まあ、言わなくても分かるか。

「お母さん！ ただいまー！」

すると中から桃子さんが……。って、若……。え？ これ本当に桃子さん？ 美由希さんじゃないよね……。？ 眼鏡かけてないし……。お、恐ろしい……。どうやってこれだけの若さを保っているんだろ……。。

「おかえりなのは。あら、そっちの子は？」

「……翡翠刹那です」

「刹那ちゃんね。なのはのお友達？」

「今日お友達になったんだよ！」

「あらあら、ありがとね刹那ちゃん」

「いえ……お礼を言われるほどじゃないです」

【マスター、そろそろ夕飯の時間をした方が良いのでは？】

と、ケルンが唐突に念話で話しかけて来た。

【ん……そうする】

「じゃあ……私はこれで」

「え……帰っちゃうの？」

「お夕飯くらい食べて行けば？」

「さすがにご迷惑ですし……なのはとは明日でも明後日でも会えるから……」

「迷惑なんかじゃないよつ、ねえ、一緒にご飯食べようよお……」

うつ……その上目遣いは非常に反則……。

「そうよ？ 迷惑なんかじゃないわ」

追い討ちをかけるような桃子さん……。はあ……仕方ない。

「……分かりました。じゃあお言葉に甘えさせていただきます」
と、一礼。

こう言っちゃなんだけど、今更ながらに自分で作るの面倒。
作れなくはないけどね。

時は進んで夕飯。

目の前には桃子さんと美由希さん、と恭也さん。なのはの言う通り
恐い顔してる……。

それを覗けば他愛のない会話の飛び交う普通の夕食だ。

「そっいえば刹那ちゃん、ご両親は大丈夫？」

と、美由希さんのなんて事はない質問。だけど……、

「失踪してないので大丈夫です」

「……は？」

「……いや、まあ。亡くなった、とかならまだしも、失踪したとかだったらそんな反応だよね……」。

「どうも、祖父母の教育に耐えきれなくなって失踪したらしいです。今はどこにいるのかも知りません」

「あー、えつと、ごめん、ね？」

「いえ。兄も先日失踪したので、もうぶっちゃけどうでも良いです兄、という辺りで恭也さんが反応したけど、まあ良い。

ていうか……今更だけど凄惨な家庭環境だな私……」。

「おばさん達は？」

と桃子さん。

「アメリカにいます」

「じゃあ……一人暮らし？」

「はい」

……桃子さんまでちよつと暗くなった。

と、さつきから黙っていた恭也さんが口を開いた。

「……その耐えきれなかったらしい教育って？」

「三歳の私を犯罪者しかいない孤島に放り込むような教育です」

「冗談は聞いてない」

「残念ながら冗談じゃないんです」

子供に対して随分と棘のある喋り方……は置いといて、さすがに桃子さんと美由希さん驚いてるな……。まあそりゃそうか。普通三歳の子供をそんな所に放り込むわけないし……」。

当の恭也さんも、ちよつと驚いている様子。

「……本当か？」

「本当です。基礎的な戦闘技術を教えてそんな所に放り込まれました。たった三歳で。それも犯罪者全員倒せ、なんて言うんですから、意味が分かりません」

これ実話。本当です。

「それで生き残れたのか」

「だからここにいないんじゃないですか」

「……後で道場に来い」

「ちよつ、恭ちゃん!？」

「うわー……女の子であることも忘れて私に戦い挑んでくる気だ……」

「相手は女の子だよ!?　なのはと同じ年の!」

「強ければ関係ない。それに、お前だって女だろ」

「どれだけ強くなりたいんだこの人……。お父さんのこと、そんなにショックだったのか。」

「……めんどくさいし、瞬殺しよう。」

で、またもや時は進んで道場。

——本当に戦わなくちゃいけなくなりました。

一応持つてる武器は双剣、で良いのかな。とりあえずそこまで長くない二本の木刀。

審判は美由希さん。

「……とにかく瞬殺。それだけを考えよう。」

「じゃあ……」

美由希さんが私と恭也さんを交互に見る。そして――、

「始めっ!」

……決しました。勝負。

え?　速過ぎて意味が分からない?　簡単、神速より尚速い、もはや目で追うことすらバカらしくなるほど、なんてものじゃないほど、もはや光速じゃね?　くらい速いスピードで接近して首筋にびしっ、と決めただけ。

ただそれだけだよ?　まあ、この人相手にそんな事出来る人、私くらいしかないかもだけど。

「………………。あれ?　もう終わり?」

「……みたいですな」

本当にあっさり過ぎて、逆に意味が分からなくなっているらしい美由希さん。気持ちには分かるよ。

……ちなみに、この後恭也さんは目を覚ました後お説教されました。桃子さんに。

* * *

再び時は進み士郎さんの病室。

え？ 時間も場所も変わり過ぎだつて？ 気にしちゃダメ。

一応、今日は遅いから泊まっていけば、って言われたけど、家は近いしここ来なきゃいけなかったしで断った。

さて、士郎さんだけど……どうしよう。さすがに急に治るのは変だよねえ……。

「……世界の改変……開始」

瞬間、この空間が灰色に染まる。

同時に何やら何も書いてない、トレーディングカードくらいのモニターがいくつも私の目の前に現れた。……扱い方は頭に勝手にインストールされている。

「高町士郎さんは、今の怪我が二週間くらいで治り、退院出来るほどの治癒力を持つと定義する」

一枚のモニターを横に弾き飛ばす。ちなみに、定義とか言ってるけど、単純にキーワードなだけらしいから、あまり意味はないみたい。

「これらの定義で世界を改変する……！」

パキリ、と、灰色の世界が砕け散り、元の景色へと戻っていった。……ん、成功。

「う……」

「あ、起きちゃう……」

さっ、と窓に枠に飛び移り、飛び降りる。さすがに姿を見られる訳にはいかない……。

まあ、普通に着地出来る訳だけど――、

「痛ッ……」

今頃痛みがまわって来たか……。世界の改変の代償。どうも今回は、左肩辺りが中から軽く破裂したみたい。血が服に滲んでる……。

「はぁ……帰ろ……」

とぼとぼと、私は帰路についた……。

* * *

なのはSide

せつなちゃんと会った次の日。お父さんが目を覚ましました。

なのはをふくめ、家族みんなが喜んでいました。お兄ちゃんとは、昨日のことでお父さんに怒られてたけど……。せつなちゃん強かったなー、お兄ちゃんを一瞬で倒しちゃうんだもん！

それにしても、せつなちゃんと出会えたことが嬉し過ぎて、ついご飯に夢中になっちゃってお話し聞いてなかったけど、お母さん達とせつなちゃんは何の話をしてたのかなぁ。今度聞いてみよ。

そういえば、お父さんが昨日の夜だれかが病室にいた、って言うてたけど、だれだったのかなぁ。お母さん達は行ってない、って言うてたし、せつなちゃんは病院知らないだろうし……。うーん……だれなんだろう……。

まあ良いや！今日は朝電話して、せつなちゃんとあそびにいく約束したから、かえったら公園にいくじゅんびしなきゃ！！

Side out…

第二話「邂逅したり、します byケルン」(後書き)

台詞多いかも……。やっぱり一人称は苦手……。

第三話「戦艦と練習と小学校 by 刹那」(前書き)

バカみたいに連続投稿。

第三話「戦艦と練習と小学校 by刹那」

背中ネコ号。

私がヘルから貰った、えーっと、次元航空艦？　だっけ。そんな感じの名前だったはず。正しくないなら教えて。

とにかく、私は今その背中ネコ号にいる。一応、外観とか武装の話をした方が良さのかな。

まず外観だけど、ナデシコとラー・カイルムを足した感じ、かな。その辺は各タイメージお願い。で、艦の名前の通りブリッジの背中？　に、リトルバスターズジャンパーの背中にあるネコのマークがある。簡単に言えばそんな感じ。

次に武装。とりあえず対空砲と小型のレールガンが上と下に数十個くらい付いてる。側面には何故かメガ粒子砲ではなく、ゴッドフリート。アークエンジェルとかのあれね。一応、メガ粒子砲もブリッジの下でちょっと前辺りにある。あとは後部の方にミサイル、デンドロビウムの箱みたいなのがいっぱい詰まって、勝手に生産されるらしい。あ、確実に分かり辛いから言いなおすけど、つまり箱が発射されてそこから小さいミサイル（でも火力はバカみたいに強い。しかし何故か非殺傷可能）が百個近く発射される、っていうやつ。

ちなみにナデシコのごとく、艦の前面が二つに分かれる。あとは分かるよね、グラビティブラストが発射される訳。当然、なのかは微妙だけどディストーションフィールドも展開される。ミラージュコロイドも、なんか普通に使えた。宇宙じゃないのに。装甲はとりあえず超ド級対魔力装甲GXとやらで出来ていらしい。プレシアさんの一撃も防げるんだって。きつと凄いだろ。うん、凄いだろ。それ以外どう反応しろと？

あ、それと何故か知らないけど、相転移エンジンが積まれてる。いや、当然なのかもだけど、真空扱いされてるみたいで、フル稼働

出来るんだよ。あの女神様、妙な改造してくれる。助かるけど。

更に更に、ほんつとうに何故か知らないけど、ボソンジャンプが可能。A級ジャンパーがいないのに。デイストーションフィールド張ってなくても誰も消えない、という意味の分からないジャンプ。一体どうやってるんだろう……。

システム面とその他面に突入します。え、微妙にもう入ってる？ 気にしちゃダメ。

AIが搭載されてます。なんか、オモイカネとネコって名前の謎のAIが。前者は分かるど後者は何者？ 背中のネコ号なんて名前だからいるの？ でも最近発覚したけど、結構高性能なAIみたい。もしかして、ここにルリがいたら、ナデシコより無敵になれるんじゃないだろうか。

さて、なんで格納庫があるの？ と思って来てみたら——エステバリスカスタムとか、ブラックサレナとか、コロニー製のガンダムとかがありました（笑）。

いや、もう笑うしかないから……。これのためのパイロットとして、コロニー製のガンダムにはウイングゼロカスタムに素恭介、ヘビーアームズカスタムに理樹、デスサイズヘルに鈴、サンドロックに謙吾、ナタクに真人が指名されていた。……何故。

ていうかデスサイズに鈴が一番疑問。サンドロックは百歩譲って剣だから良いでしょう。二刀流だけど。でも何故にデスサイズに鈴？ 意味が分からない。本当、あの女神様は何を考えているんだろう。

ウイングは……中の人で選んだとは思えない。いや、きっと強いんだらうけど。

ナタクは一番格闘戦っぽいから真人なのかな。ヘビーアームズはきっと消去法でも使われたと思う。もしくは沙耶ルートるとき銃を使っていたからか。

エステバリスには、こっちの方が意味分からないんだけど、サーペントテール+ジャンク屋が乗ってました。はい、ガイさんとか口

ウさんとかですね。本当に意味不明。

まあ、何はともあれかなりの防衛力。だというのに、機体は追加可能らしい。過剰防衛？

あ、言い忘れてたけど、全部非殺傷設定が可能らしいよ。技術って凄いね。

ふう。まあそんな話は置いて。

なのはと遊んで家に帰って背中の中のコ号に来た私は今、モビルスーツが暴れても大丈夫なほど広いシミュレーションルームにいます。え、そんなに広いのかって？ 少なくともアースラよりは広いよ？ 単純に技術の差だよ。よく分からない物を使って空間を広くしているらしい。だから本当はアースラのくらいしかないのに、その数倍くらいの広さになっている、っていうこと。終わったら元の広さに戻るみたいだけどね。

さて、何故私がそんな所にいるかというと……。

「ん……とりあえずこの無印では、レーヴェとレンで進めるから、ユニゾン、及び非ユニゾン状態での戦闘訓練」

つまり、私はこの世界の魔法に慣れる、ユニゾン状態の感覚を確かめる、などなどで、目の前にいるレーヴェとレンは、ユニゾン状態の感覚を確かめる、その状態の戦闘に慣れる、非ユニゾン状態での単独戦闘の訓練、とかをする訳だ。

あ、それと、レンは今私と同年、レーヴェは……十歳くらい？ 多分そのくらい。

更に、この二人に限らず、みんなデバイスを持っているらしい。もう大戦力だね……。ユニゾン時は私のケルンと同化するらしいけど。

「じゃあ……まずはレーヴェとユニゾンしてみる」

「分かった」

「レンはどうすれば良いのかしら」

「あそこに模擬戦用の機械人形があるから、それ使って訓練。難易

度は好きに……」

「ふうん。退屈しないで済めば良いけど。ぶっ壊しちゃって良いのよね」

「お好きに……」

まあ、壊されてもあとで勝手に治る変な機械人形みたいだし、特に気にすることもない。

「ユニゾン・イン！」

言つと同時に、何だか目線が高くなった気がした。あれ、なんかバリアジャケットも変わってる？　まるでレーヴェみたいな感じに……。

「って……私の面影が全くないんですけど……」

「どうやら、ユニゾンしたやつと同じ外見になるようだな。身長も変化している」

ちなみに、ユニゾン状態の時は、中と外、つまり身体を動かす方が変えられるようです

「私が動かすか、レーヴェが動かすか決められるってこと……？」
そういうことです。ユニゾンした方が能力とかもあげられているので、その状態でレーヴェが戦うもよし、マスターが戦うもよし、ということです

「……リンとかのユニゾンデバイスとは全然違う」

「だが、便利ではあるぞ」

まあ、確かに便利といえば便利かもね。私にとって苦手なタイプは、レーヴェ達にとつたら得意かもしれないし、レーヴェ達が苦手なタイプは、私にとつたら得意かもしれない。そういう場面場面で入れ替わるのは便利というか、かなり有利な戦いを出来るかもしれない。

「さて、一応俺とのユニゾン時に使える魔法を確認しておくぞ」

ユニゾンすると私の魔法と同時に、レーヴェ達の使う魔法っていうかクソ魔法が使えるようになるんだった。そういう特別製なんだよ。

『俺の場合は冥皇剣、鬼炎斬、零ストームにシルバーゾーン、アースガードに分け身、あとはD・ファントムの技だ』

「AAキャンセラーとか？」

『そう。どうも俺の魔法としてインストールされているらしい』

結構ズルい気がするんだけど……。

『当然だが、AAキャンセラーも零ストームも魔法のキャンセルは出来る。たとえ発動していてもな』

「巻き込めば消える、っていうことでいい……？」

『ああ、問題ない』

幻想殺しの広範囲版かよ……って言いたくなる。

『アースガードは当然だが重複は出来ない。そのかわりなんだろうと確実に防ぐはずだ』

「相変わらずの鉄壁……」

『俺に関しての説明は以上だ。質問は？』

「回復系は？ 確か持ってた気がしたけど」

『刹那が持っているはずだ。導力魔法は使えるんだろう？』

「うん……。分かった、もう質問はない」

『じゃあ——始めるか』

向こうでレンが最高難易度の傀儡に、何気に苦戦している中、こっちは初級で始める。嘗めてかかるから大変なんだよ、レン……。

「じゃあ——鬼炎斬！——」

* * *

さて、説明は必要だろうか。

一応、一通りの魔法は試してみた。レーヴェのとD・ファントムを含めてね。

鬼炎斬は一瞬で機械人形吹き飛ばしたし、冥皇剣は当然のごとく。

零ストームとAAキャンセラーは本当に魔法を消した。シルバーソーンは、何故か機械人形ですら混乱させてたし、ハイパーアームシヨットはディバインバスターがスターライト・ブレイカーに近づいた感じの砲撃だった。ハイパーレーザーは普通にレーザーが出た。まあそんなところ。他にもあるけど、ちよつと面倒なので省く。

「で、レン大丈夫……？」

「はあ……はあ……だ、大丈夫よ……。れ、レンがあれくらいで……疲れるわけじゃない……っ」

いや、確実に大丈夫じゃない。どう考えても大丈夫じゃない。

「えーっと、レンとのユニゾンはまた今度にする？」

「いーやつ！ レンは大丈夫だからさっさとやりましょう！ー！」

「でもレン、疲れてる」

「レンは疲れてないッ！ー！」

「ただだけ負けず嫌いなレン……。仕方ない、ここはそういうことにしておくか。」

「分かった、レンは疲れてない、元気ハツラツ、OK？」

「OKに決まってるわ」

「じゃあ……行くよ。レーヴェはレンと同じく機械相手にしてて」

「分かっている。じゃあ、レン、あまり無茶はするなよ」

「分かってるわ。まあ、レンにとっての無茶なんてものが、どれほどあるのか知らないけど」

「「ユニゾン・イン！」」

ピカッ、と視界が光ったかと思うと、まあ言うまでもなくレンになりました。

「本当、フリフリなドレスだねえ……ゴスロリ、で良いんだっけ？」

「じゃあ、レンの魔法を教えちゃうわよ？」

「ん……お願い」

『レンの場合は、ブラッドサークル、カラミティスロウ、カラミティブラスト、クロックダウン、レ・ランデス。あとはパテル』マ

テル呼んだり、機巧魔神呼んだりつてところね」

ちゃんとそれは付いてたんだ、よかった……。

ちなみに、あとで聞いた話だけど機巧魔神は虚数空間でも動けるらしい。さすがだよ……。

「じゃあ……始めよう」

『うふふ』 今度はすぱつと、殲滅するわよ』

ああ……やつぱり苦戦してたんだ。

で、また時間は飛ぶ訳だけど。

一応説明しておくね。ブラッドサークルは大鎌、つまりネメシスリップに薄い魔力を纏わせた上で、回転しながら薙ぎ払っていく魔法。これはなんか発動したまま普通に移動出来たから、結構使えるかも。

カラミティスロウは、ネメシスを投げるんじゃないくて、振ったら鎌状のがブーメランみたいに飛んでいった。魔力刃が飛んでいったみたい。

カラミティブラストは時空に亀裂をいれて、不可逆の力で敵を撃つ、ってやつだけど、それを零距离で撃ったら機械がぐしゃぐしゃになってた。

クロックダウンは、バカにしてるのか？ ってほどに遅くなったし、レ・ランデスは、引き寄せ効果の場が出来て、コウモリと一緒に突撃して一閃する、まあゲーム通りな魔法だった。引き寄せ効果は結構強いみたいで、機械人形は全然動けてなかった。固まった敵にかなり有効だね。

さて、機巧魔神は白銀を出して終わった。本当に空間を切断してたよ……。

とりあえず他の機巧魔神は、今度にする事にした。

で、パテルⅡマテルだけど……。

スターライト・ブレイカーの極太砲撃が二つ飛ぶような一撃を放ってくれやがりました（笑）。

いや、ようになっていうより本当に飛んだんだけどね。ダブルバスターキャノン、だっけ。スターライト・ブレイカーよりオーバーキルだよ……。ぐしゃぐしゃなんてもんじゃなくて、消滅してたもん。まあ、そんな感じで終わった訳です。

ちなみに、レーヴェは上級のコースで楽勝、とまでは行かなくても、苦戦はしなかったそうなの。

今度は最高難易度もやってみたいそうです。

そんな訓練も終わり、とりあえずユニゾン陣に会ってみよう、と思っただけ……。

凄いいっぱいいた。

えーっと、簡単に言うと、遊撃手の方々だったり元遊撃手だったり特務支援課だったり聖杯騎士だったり冒険家だったりその他もろもろ……とにかくいっぱいいた。まあつまり、執行者+3rdの方々+零の方々+イスVSのイス陣って考えてくれれば楽かと。いやー、これでみんな魔力SSだからね。過剰戦力なんてもんじゃない気がする。

何人いるのかは面倒だったから数えなかった。っていうか、全員とユニゾンなんて絶対しないと思うんだけど……。

あ、分かっているとと思うけど、みんな服は同じでも歳はゲームより若いからね？

* * *

さて、今私は七歳。え？ いい加減慣れたけどさすがに飛び過ぎ？ 日常は変わらないよ、なのはと遊んだり訓練したりのんびりし

たりしてただけだもん。

あ、当然士郎さんはあれから二週間で退院しました。お医者さんも驚いてみたい。

まあ良いや。とにかくにも、今私は私立聖祥大附属小学校の入学式にいます。と、いうより、壇上で喋ってます。

迂闊だった。つい、「簡単……」なんて調子がつてオール満点なんてとってしまったばかりに、こんな所で喋らなくてはいけなくなった。だって私、中学二年生にして大学卒業くらいの勉強やらされてたんだもん……、楽勝過ぎてついつい……。

まあ、心にもないことしか喋ってないからいいけど。

で、入学式が終わって、クラス発表とかに目を通してる訳だけど、「せつなちゃん！ 同じクラスだよ！」

「うん……よかった」

まあ別に、別のクラスでも友達として終わる訳じゃないから良いんだけどね。でも同じクラスであるのに越したことはない。

あ、当然だけどアリサとすずかもある。まあまだ友達フラグなんて立ってないので、話しかけたりする必要もない。

二度目の小学校生活。ん、楽しみだ。平和な学校生活っていうのはどんなものか、この目で確かめさせてもらおう。

第三話「戦艦と練習と小学校 by 刹那」(後書き)

ふう……レンとレーヴェの喋り方、あんなのでよかったかな？

現状の設定集

はいおはようございます、こんにちは、こんばんは、おやすみなさい。レン・バレッタです！

一日に連続投稿しまくっております！

まあ、仕事がつまって、先にこつちをいくつか投稿しておこう、という考えなので、ご了承くださいな。

さて、サブタイトルの通り、現状の設定集です。

一応目次みたいなを書いておくと、

・主人公「翡翠刹那」の現状

・デバイスの設定

・その他キャラの設定

・背中ネコ号の設定

・スペル・マジックの設定

っていう感じですかね！。

あ、設定なんて完全把握しててくれ！ という方は、回れ右していただいて、本編の更新をお待ちください。まあ、ちょっとした細かいところまで書いてるので、読むに越したことはないと思います

が。

では、始めますよー。

主人公「ひいろせつな翡翠 刹那」

R o D S その1の主人公。前世では、スペル・マジック四大名家の一つ、翡翠家の一人娘だった。父親に種がなかったことが原因で、正規の手順で授かった子供ではないため、正確には人間ではない。刹那にはある特殊な永続魔法がかけられている。現在の本作品では正体不明。しかし、発動すると同時に副作用があるらしいことと、最高神の魔法を人間の出来る限り再現した物らしいことから、女神ヘルですら、それを改変することが出来ないほど強力なもののようなのだ。

左腕には、バルキリー・エッジ殲滅機械爪という物が装備、というより組み込まれているらしい。取り外しは現状出来ない。まだ分からないが、おそらく非殺傷は不可能。

外見は前世と同じ。背中まである銀髪に、琥珀色の瞳。

前世では中学二年生まで生きていたが、発育はそれほど良いものではなく、身長は145・27センチ、胸は周りはB、ないしCばかりであったが、彼女はA止まり。その分体重は軽く、身体の線は細め。ある意味スタイルは良い。が、前世での状態を見る限り、成長に関してはそこまで期待出来ないかもしれない。高校生くらいにまでなればもう少し成長するか。

世界改変の力を持つ。これを使うと、基本的になんでも出来るが、改変の規模と数によって刹那自身に負荷がかかり、体内から破裂して出血、などの怪我をする。例は第二話。

リリカルなのはの魔法、導力魔法、スペル・マジックが使える。ガードスキルが使える。

魔力光は銀色。

リリなの魔法

・ライジングバレット (Rising Bullet)

ホーミング性能を持つ魔力弾。「バースト」のコマンドで、一発一発が拡散して散弾のようになる。その状態だと、ホーミングはオートになり、制御は不可能。現在一気に使えるのは五発。

・ルナティック・バスター (Lunatick Buster)

瞬間的小型集束砲撃魔法。ケルンバイターIIスペル・ロッドモード時に、先端に円形魔法陣が現れ、そこに魔力が集束、小型の集束砲が放たれる。威力はティバインバスターを少し落としたくらい。移動しながら集束出来る。

・ディメンション・ブレイカー (Dimension Breaker)

ぶっちゃけSLBと似たような物。違うのは三点同時集束であつて、つまりダブルバスターキャノンがトリプルバスターキャノンになったような物。威力は折り紙付き。

ケルンバイターのおかげで、デバイス内で魔力を集束、なんてふざけたことが出来るらしく、当然移動しながらのチャージが可能。周囲の魔力も一応集めるが、基本的に刹那魔力を主に集束する。その分、三つも撃つから魔力消費がかなり激しい。SSSの二倍とはいえ、SSSを一〇〇とし、その二倍だから二〇〇。その二〇〇あるうちの五〇は使う訳だから、精々連続で使っても四発が限界。それでもかなり脅威ではある訳だが。

・プリベントー (Preventer)

防御バリア。防御力は高めではあるが、受けるより、流すことを考えた防御魔法。移動が可能。

・カイト・シールド (Kite Shield)

二層のラウンドシールドと考えると楽。

・セイバー・バインド (Saber Bind)

対魔力仕様の剣型のバインド。スペル・マジックの理論を応用しているらしく、抜け出すには混めた魔力を上回る魔力をぶつけるか、時間をかけてブレイクするしかない。

相手の足下に魔法陣を出現させ、上空から剣が十数本落ちてくるという辺り、スペル・マジックの面影を感じさせる。ちなみに魔法陣は相手の動きを遅くする効果を持っているらしい。レンのクロックダウン的な物だと思われる。

・リボン・バインド (Ribbon Bind)

チェーンバインドがリボンになっただけ。

・バリアジャケット

白いマントに黒いジャケットと膝よりちょっと上くらいのスカート。裾に白い線。胸には銀の胸当てが取り付けられている。手には指先だけ出るグローブ。足は銀色のブーツ (エレメンタルジェイドを知っている人は、レンのはいてるブーツをイメージすると分かりやすい)。マントの肩の部分には、縁が黒くて中が白い小さな盾が付いている。ぶつちやけワルクラにその内出てくる服。

刹那のデバイス「ケルンバイター」

レーヴェのデバイスは『ケルンバイターX』。刹那による愛称はケルン。レーヴェは普通にケルンバイター。

数十個ものモードを持つという前代未聞 (?) のインテリジェントデバイス。現在自身自身の性格をどのように向けようか模索中の様子。その内チャラくなったりツンデレになったりするかもしれない。一応、性別は男性のようだが、彼の最終的な性格によっては性転換するかもしれない。

高性能では収まりきらないほどの性能を秘めていると推測される。下手したらロストロギア指定される可能性も……。

ちなみに、ケルンバイターXは、高性能ではあるが、刹那の物ほどではない。

ユニゾンデバイス「剣帝 レオンハルト」

ゲーム「英雄伝説 空の軌跡」シリーズに出てくる結社「身食ら^{ウロボ}う蛇」の執行者No.？。魔力光は、髪色と同じアッシュブロンド。愛称はレーヴエ。

魔法キャンセル、なんてふざけた効果を持つ魔法や、砲撃魔法、近距離の強力な魔法などを持つ、最強の域に足を踏み入れている一人。『剣帝』の名は伊達ではない。

使用魔法は黒騎士とD・ファントムの物（何度も言うがクラフト）。

現在おそらく十代後半くらいだと思われる。

ユニゾンデバイス「殲滅天使 レン」

空の軌跡SCから登場する、結社の執行者No.？XV。ゲーム内では3rdで一二歳。現在は刹那と同じ年。魔力光は髪色と同じ紫色。一人称はレン。

ゲームでは大半の技が即死付きという本当に一二歳なのか？と疑いたくなる少女。今作品でも、即死はないが、かなり強力な近距離魔法、というより本当にクラフトとしか言えない魔法を使う。遠距離魔法はない。パテル＝マテルを魔法の中に入れるなら、ダブルバスターキャノンがあるが。

本来は呼べないが、刹那がヘルに頼んだことで、^{アスラ・マキナ}機巧魔神

が呼べる。ちなみに刹那が知る限りの数で、全部出すことも可能。
機巧魔神は、虚数空間でも動けるらしい。

武器は大鎌、名称はネメシスリップ。基本的にレンは「ネメシス」と呼ぶ。

次元航空艦「背中ネコ号」

名前は刹那の思いつき。

過剰防衛としか言いようのない防衛力を持ち、宇宙でもないのにミラージュコロイドが使えたり、真空じゃないのに相転移エンジンがフル稼働したりするチート艦。

ついでに過剰武装。悪い言い方をすると、小さな子供が考えるような戦艦。

武装

- ・対空砲、小型レールガン

- ・マイクロミサイル（箱から出るあれ）

- ・ゴットフリート

- ・メガ粒子砲

- ・グラビティブラスト

- ・（刹那は実は知らないが）???及び????

スペル・マジックの設定

『スペル』と呼ばれる単語の配列によって発動する魔法。

同じスペルを扱っていても配列が違えば違う魔法が発動する。スペルの数が多ければ多いほど上位の魔法が発動する。発動のために必要な力は、魔力。リリなの魔力とは別。

防御魔法、及び一部の魔法にはスペルがない。

殺傷能力がない。

スペル無しでも魔法は発動可能。その代わりに使用魔力がスペルありの時の五倍。

ちなみに、スペル・ロッドという機械がないと発動出来ない。

さて、いかがですか？ 細かい設定、とか言っておきながら軽いネタバレを含んでいますねー。刹那の魔法とか。まあ、その辺はまだ許容範囲って事にしておいてくれるとありがたいです。

ではでは！ 今日の連続投稿はここまで！ 明日は投稿出来るかは分かりませんが、とりあえず頑張ってみますよー！ じゃあ、現状の設定集でした！

第四話「ウロボロスではないが結社だ byレーヴェ」

帰宅途中。

私達は誘拐されていた。

……まあ理解出来る人の方が多いと思うけど、一応説明しておくね。

かの友達フラグが立って以降（私は離れた所で傍観していた）、アリサとすずか、なのはと私の四人で下校するのが普通になっていた。当然屋上でお昼を食べたりもする。

で、アリサとすずかはえーっと、バニングス家と月村家？ のお嬢様で良いのかな？ まあそんな感じで、巻き添えといったらあれなんだけどなのはと私を含め、四人は誘拐されていた。よく分からない黒ずくめの男の人に、黒い大型車に乗せられて。

「へっへっへ、上手く行きやしたねえ兄貴。おまけもついてやすけど」

「家への連絡はどうなってるんです？」

「俺達が到着し次第、だ」

「じゃあ来るまでの間、こいつらで遊んじやっても良いんですかい？」

「ご令嬢お二人はダメだ、が、おまけなら好きにして良い」

「ちえー、まあ良いや。どっちも結構可愛いしなあ？」

「ひっ……！」

犯人の一人がこっちを変な目で見て来た。なのははかなり怯えていたが、私はどうでもいいと心の中で思いつつ、恐がっている振りをしていた。悲鳴はあげなかったが。

【ケルン、背中の中ネコ号に連絡は？】

【”警察”が向かうそうです】

【ん、分かった】

まあ、誰だろうと魔法も何も使えないこの連中に負ける訳はない

と思うけど。

「ごめん二人とも……巻き込んで……」

「ごめんね、なのはちゃん、刹那ちゃん……」

「う、うん……大丈夫……」

「友達だから……気にしないで」

と、いうより、私が油断していたというのも原因の一つだけど。ぶっちゃけこの程度の連中なら素手でも勝てる。魔法なんて使わなくてもね。そもそも恭也さんよりも弱い連中に負ける訳がない。多数対一だって何回かやったことあるし。

でもかなり油断していた。まさか三人と話すのが楽し過ぎて背後からの襲撃に気付かないなんて……。

残念なことに縄抜けなんて芸当は私には出来ない。魔法が使えれば簡単だけど、さすがに見られる訳にもいかないし……。

なんて思考をしている間にどこかの倉庫にたどり着いた。

すると、私達は縛られたまま男達に担ぎ上げられ、倉庫の中に連れられる。……ていうか担ぎながらお尻触ってくるなこのロリコン

……！

ドサっ、とベッドの上に放り投げられる。どうもこの連中、ここを根城にしているのか、ベッドやら机やらが置かれ、ゴミも散乱している。中にはさっき乗っていた男達四人を含め一〇人くらい。中にいた六人はみんな肩にマシンガンを引っ掛けている。

「上手くいったようじゃないか」

「ああ、周りには誰もいなかったしな」

幹部っぽい厳つい男二人が笑いながら話している。ていうか、スキンヘッドでグラサンってマフィアっぽいと思わない？

「で？ おまけ二人でなら遊んじゃって良いんすよねえ？」

「好きにしるロリコン。つたく、子供で遊ぶのの何が良いんだか」

「未発達な子供だから良いんすよー、成人してるのじゃもう熟しちやってて……」

「へーへー、お前の子供好きはみーんな知ってるよー。ほら、他の

連中も遊びたきや遊べー」

と、四、五人の男達がこっちに来る。

……私は良いけど、なのはまで襲われるのは非常にムカつくな。いつそのこと世界の改変でも使ってしまったら。それとも魔法使ってから後で記憶を――。

「大丈夫だよお嬢ちゃん？ 痛くしないから。ういっひっひ」
気持ち悪……なんて思っていた瞬間。

小さな悲鳴を上げて一人の男が倒れた。

「な……！ 誰だ……！？」

そんな事を言う間にもう一人、更に一人と倒されていく。

「クッ、どこだ！」

「何言つてんだよ？ お前の後ろにいるじゃねーか」
「ッ……？」

ガチャリ、と首筋に黒い何かが突きつけられる。銃ではなく、機械的なハルバード。いわゆるスタンハルバードというやつだ。三木さんボイスな彼は、ランディ。ランディ・オルランド。

「くっ……てめえ……！ ぐあっ！」

「……後ろ、気をつけた方が良いです」

そして、魔導杖なんて大層な物を持って来たのはティオ。

と、なんか突然手を縛っていた縄がほどかれた。

「助けに来たよ、みんな」

いつ居たんだ……と言いたくなるこの美人はエリイ。ていうか、てつきりロイドが来ると思ってたんだけどなあ。さつき気絶させたの射撃っぱかったし。

「何者だよ……てめえら」

ランディにスタンハルバードを突きつけられている幹部が言う。

その間に他の男達は倒されていた。倒れた男達を中心に一人の青年。……ではなく、少年。彼はまだ一二歳です。ちなみに後ろにいるエリイも。まあ、ティオなんて八歳だけど。あ、ランディは一五歳くらい。

そんな少年、ロイド・バニングスは言う。

「警察”だよ”」

* * *

それから二〇分後、ロイド達が帰るのと同時に恭也さん達が走って来た。土郎さんやら忍さんやら鮫島さんやらも当然いる。何故かその後ろからパトカーがやって来た。……普通逆か一緒にじゃない？

「なのは！ よかった……！！」

「すずか……！」

「アリサお嬢様……遅れて申し訳ございません……」

「刹那ちゃん、無事でよかった！」

上から恭也さん、忍さん、鮫島さん、土郎さんの順。

と、恭也さんが、

「刹那……責めるつもりはないが、お前が付いていながらなにやってんだ」

「すいません……会話が楽しくって、油断してました……」

「恭也、もう良いわ。彼女もまだ子供ですもの、常に油断しないなんてことは出来ないわよ。いくら恭也より強くてね」

「分かってるよ、だから責めるつもりはないって言ったろ？」

そうやって笑いながら会話をし、適当に事情聴取を済ませて帰る。ちなみに、ロイド達の事は内緒だよ。私が、気を失ってて気がついたら犯人全員が気絶していた、ってことにした。

土郎さんは相変わらず今度試合しよう、なんて言っていたけど、適当に誤魔化した。

みんなと別れ帰宅する。あー、なんか疲れた。と、言う訳でお風呂に入る。

お風呂を湧かすのも面倒なので、背中ネコ号に行き温泉に入る。え？ 何で戦艦に温泉があるのかって？ そんなのアーケエンジンに聞いてよ。あっちだって天使湯だかがあるでしょ。

ちなみに、今私と一緒にレンとティオが温泉に入ってます。

「ふう……」

「はあー……生き返るわねえ」

「ですね……」

子供三人、ゆったりと温泉につかる。どんな技術を使っているのやら、露天風呂みたいな感じになっているため夜空が見える。当然、お風呂も柵一つで遮られている。一応、向こうにはレーヴェとロイド、ランディが入っているらしい。

会話を聞く限り、一応会話は三人で行われているようだ。ちょっと安心。

「ねえ刹那ー、今日もレンの新記録を出したのよー」 機械人形も対した事ないわねー」

言っているのは最高難易度の機械人形模擬戦。最初はかなり苦戦していたが、最近ではちよつとずつ苦戦しなくなってきたらしい。システムも、同じ難易度の強さも日々更新されているため、さすがの天才も一気に余裕とまでは行かないけれど、毎日新記録を出しているようだ。

ちなみに、記録とは全滅完了時間の事。

「さすがレン……」

「……他の最高難易度挑戦者は、まだまだですけどね。一応、今の所最高難易度挑戦者で最高記録を出しているのはレーヴェさんです。まあ、分かりきっているかもしれませんが」

それは当然だろうね。剣帝の名は伊達じゃない、ってことだ。

「刹那もやってみれば良いのに、機械人形模擬戦。執行者と匹敵す

るくらいの実力くらいは持っているじゃない。レンと互角くらいには出来ると思うわよ？」

「面倒……訓練なら別のだってあるし、この世界の魔法を作ったりもしなきゃ……」

一応、いくつか出来たけど、バリエーション、派生系が作れないか考えたりもしているのだ。

「ふうん。まあ良いわ、別に訓練方法なんて人それぞれだしね。レンはバカみたいに強制させたりしないし」

「……じゃあ誰かは強制させたりするの……？」

「エステル達よ、まったく……ニンジンは嫌いなのに無理矢理食べさせようとするんだから……」

「親が子供の好き嫌いを直そうとするのは当然だと思いますが」

「それは分かるわよ。でも限度って物があるじゃない、いくらなんでも羽交い締めにしてまで食べさせようとしなくても……」

「……そんなにニンジン嫌い？」

「嫌い。食べたいなんて思わないわね。あんまり美味しくないし。

でも、一応カレーとかに入ってるニンジンは二つくらいは頑張って食べてるのよ？ ちよつとくらい褒めてほしいわ」

「嫌いな物を食べるのは確かに頑張る事ですが、それで威張られても困ります」

「威張ってないわ、胸を張ってるだけよ」

「ない胸を張っても惨めなだけです」

「ティオだって無いじゃない！ レンより年上なのに！」

「私はまだ発展途上なだけです。たかが八歳で胸がない、なんて言われても困ります」

「レンだってまだ五歳よ！」

「なのでない事を気にしても仕様がなですよ」

「自分で言っておいてそれ言う！？」

平和だね。実に平和だ。レンもティオも元気だし、向こうは全然
男湯
気にしてないみたいだし。うん、非常に平和だ。

と、新たな温泉のお客さんが――。

その正体は……ティータだった。子供だらけだね。

しかし、目的は温泉ではなかった。

「刹那ちゃん！ ヨナくんがちょつと話があるって！」

「ヨナが……？」

「ヨナはパソコンを使っていろいろ遊んだり、情報収集したりして
いたみたいですから、何かしらの情報でも掴んだんじゃないですか
？」

「ん……分かった。すぐ行く」

私は温泉から上がって、何故か付いてくるレン達と一緒にヨナの
所に向かった。

ヨナはパソコンの前のイスにふんぞり返っていた。

後からレーヴェやロイド達もやって来たのを見ると、

「おせーぞ！ 何やってたんだよ！」

「うるさいですよヨナ。こっちも一応は急いであげました」

「あげました、って何だよ！？ せっかく情報提供してやるうって
のに！」

「私に落ちゲーで勝てたら、謝っても良いですけど」

「へん！ 言っただな？ よっしゃ、さつさとやるぞ！」

「先に情報を下さい。ゲームなんていつでも出来ます」

「ぐぐぐ……まあ良い。とにかくこれを見な」

ヨナが指差すパソコンの画面には、何やら研究データのような物
が並んでいた。それはどれもこれも人体実験のデータ。そう、子供
達を使った。

「ッ！！」

「これは……！」

レンとティオが顔をしかめる。

「こんな……こんな教団まがいの事を……！ クソっ！ ” 楽園 ”

の子供達や、レンとティオみたいな被害者達を作るような連中がこの世界にもやっぱりいるのか!!」

「ロイドさん……」

「落ち着けバニングス」

「レーヴェさん!　これが落ち着いてなんていられせんよ!!」

「バーカ、だからこそだ。今は歯あ食いしばってでも気持ちを抑えて、その気持ちをこの連中にぶつけてやれ、ってことだよ」

「ランディ……すまないヨナ、続けてくれ」

言われてヨナはパソコンを操作しながら、話を再開する。

「これを見つけたのは本当に偶然だったんだけど、こんな見ちゃアンタらが黙ってないだろうと思ってな。ほら、詳しい情報の他に場所も見つけといたぜ」

「これは……ふうん、時空管理局の闇の部分、ってことね。レンもたまにその片鱗を目にはしていたけど、ここまでとは思わなかったわ。やっぱり、完璧な正義の味方なんていないわね」

「酷い……みんなを守るための組織のはずなのに………こんな酷いよっ!!」

「ティータ・ラッセル、どこの世界にもこんな連中はいる。こう言うてはなんだが、いちいち気にしていたらこちらがもたない。が、そう感じる心は大事にしろ」

「レーヴェさん……」

「D　G教団然り、この時空管理局とかいう連中然り。まったく、人間ってやつはどうしてこんなに腐ってやがるのかねえ………虫酸が走るぜ……」

みんなな思いに怒りを露にしている。かくいう私もだ。管理局がそれなりに黒い組織だとは分かっていたけど、ここまでとは思わなかった。

………必要だ。管理局のような表だけの正義の味方よりも、表裏のない正義の味方が。

そんな考えを呼んだかのように、レーヴェが、

「まずは行動だ。どうする、刹那」

みんなの視線が私に向く。

どうする？ そんなの決まってる。いや、それでもあえて聞いたんだ。レーヴェは。

「――潰そう。そして、子供達を保護する」

「……了解した」

「ふふっ、まあ刹那ならそう言うと思ってたわ」

「もうこれ以上、私のような被害者を生む訳にはいきません」

「はいっ！」

「ああ。今でこそ違うが、特務支援課として、何より人間として、こんな奴らを放ってなんて置けない」

「そっぴうこつた。俺達もその話に乗るぜ」

みんなが笑顔で頷いてくれる。

――よし。

私は部屋の入り口にある受話器を取る。

「全員、ミーティングルームに集まってください……重大なミッシヨンについての説明が行われます。繰り返します――」

* * *

ミーティングルームには、リトバスメンバー、パイロットメンバー、ユニゾン陣、そして私が集まっていた。

当然ではあるけれど、今回ヨナによって発見されたこの人体実験施設の事をみんなに説明したら、全員激怒していた。他の執行者の連中もね。

それで私は、管理局とは別の正義の味方の組織を作りたい、と言うとみんな賛成してくれた。

さて、大体の説明やは終わった。

これからもしかしたらこういった子供達が増えていくかもしれない。いや、おそらく増えていくだろう。その子たち全員をこの背中のネコ号に保護するのは難しい。

と、いうことで、背中のネコ号の拠点とも言える巨大な都市要塞を作る事にした。

とりあえず、女神様のヘルに、そのための人員（仕様がないのでいろんなマンガやらゲームから持ってきてこさせてもらった）を要求、普通に通った。ついではなんだけど、能力追加の一つめとして、ロボットの能力とか武器（三個まで、とか言い出したので、キングゲイナーとウイングゼロのオーバースキルとゼロシステム、Vガンダムのフィンファンネル）を貰った。

そんなヘルとの通信、実は約三秒。

よし、準備完了。

「これより、私達背中ネコ号は《結社》フェンリル（仮）を名乗り、偽善だろうとなんだろうと正義の味方をする。意義がある人は……？」

……。いない。

「では、私達《結社》フェンリル（仮）のファーストミッションとして、管理局人体実験施設殲滅作戦を開始します……！」

「了解……！」

* * *

Side No

どこぞの無人管理外世界に、その施設はあった。

開発した薬の実験、能力開発実験などなど、どこからかさらって来た子供達を使い、そんな違法実験をやっていた。

今までに一体どれだけの子供達を殺して来たのか。そんな事は、この施設の研究員にはどうでも良い事だった。所詮は数の話、そんなものを考えるよりも、今日の前の実験をどうすれば成功させられるかが問題だ。

子供達はもはや抜け殻ばかりだった。

精神なんて物がぼつかり抜け落ちているとしか思えない目をする子供や、痛みはずなのにもはや悲鳴もあげない子供すらいた。

まだ心を保っていられる子供も、だいぶ少なくなって来た。

まあ当然、研究員に子供達を可愛そうなどと思う人間は存在しなかったが。

そんなある日の事だ。突如として研究所に警報が鳴り響いた。

研究所のどこからか爆発が起こる音が轟く。

研究員の誰かが何か叫んだが、そんなものは聞こえなくなった。突然倒れたのだ。

「……正直、全員殲滅したいくらいだわ。でも、そんな事をすれば、あなた達みたいなのと一緒にになってしまうもの。だから——気絶だけで済ませてあげるのよ？ レンに感謝してほしいわね。」

「投降などという選択肢は与えんぞ。悪いが、全員今ここで眠ってもらう。起きた時には牢の中だろうが、貴様らの罪に比べればまだまだ甘いぐらいだ」

「せやなあ。お前らのような外法は久しぶりや。まあ、俺はもう守護騎士やないし、外法狩りなんて二つ名も持ってへんからなあ。残念やわ」

「……みんな、子供達は救出完了……あとはここにいる奴らだけ」「了解よNo.？。……二つ名は考えておきなさいよ？ No.？じゃ微妙だわ」

「お、お前らは何者だッ！！？」

研究員の一人がそんな事を言い出した。

そんな彼を特に気にした様子もなく、ただ一人の少年と少女が——告げた。

「今はもう違うが、あえてこう名乗らせてもらおうか。《結社》身^ウ

食^{ロボロス}らう蛇、執行者N.O.？。《剣帝》レオンハルト」

「同じく《結社》の執行者N.O.？XV、《殲滅天使》レン。覚えておいて損はないと思うわよ」

「他の連中はまだN.O.やら何やら決まっとらんのだ。だから勘弁してや、俺らは名乗れへん。だから今は――」

「……その二人の名前だけ覚えて、黙って気絶してて」

瞬間、研究員全員の意識は――持っていかれた。

第四話「ウロボロスではないが結社だ b y レーヴェ」(後書き)

初戦闘！ …… けどあまり描写はない。精々最初の誘拐の時間がマシな方ですかね！。 b y レン

ワルクラは予定通りに行けば、あと一、二週間くらいで投稿出来ると思います。 b y 結城葵

第五話「そろそろ……来た by刹那」

どうも、刹那です。

まあいろいろとあってようやく小学三年生になりました。

一応説明させてもらうと、この二年はずっとなのは達と遊んだり、魔法とか模擬戦とかしたり、《結社》フェンリルとしての仕事をしたりと、そんな感じで過ごして来ました。

ちなみに、最近では《結社》の名前が結構有名になって来たみたいです。……とはいえ、彼らが知っているのはウロボロスの方であってフェンリルじゃないんだよね。まあ大抵潰しに向かう仕事してるのも名乗ってるのもレーヴェとレンだし仕様がなか。

あ、他の人達が仕事してない訳じゃないよ？ 他の人達は外で犯人達を狩り出して捕らえてるだけ。中にいる人達を制圧するのが、この二人。たまに私も加わるけどね。

まあその辺は置いといて。

今私は背中の中ネコ号のブリッジでなのはとユーノ、そしてジュエルシードが生み出したモンスター（？）を見ています。

「……リアルで見ても変な奴」

と、モンスターを見ながら呟く。

助けにいかないんですか？

「……私はフェイトの方につきし」

理由は……前も言った気がするけど、可愛いから。

あ、なのはが可愛くない訳じゃないよ？ フェイトの方が私的に可愛さランクが高いだけ。

「さて……」

艦長席につけられた、まさに未来的な通信装置（画面が空中に出現するアレ）で、私の家に連絡を取る。

「……あ、エステル？ ん……、私。今日辺りからも一つの方行くから……。ん、分かってる。じゃあ家は御願い……」

さて、行きますか。

* * *

フエイト side

第97管理外世界『地球』。

母さんが欲しがっているジュエルシードがある所……。

待って母さん、すぐに持っていくから……。

「フエイト、ここだよ」

と、アルフが指差すのはとあるマンションの一室。確か誰も住んでないから、地球（こゝ）にいる間はこの部屋を拠点にしよう、っていう話。私としては、特に異論もないので何の問題もない。精々、拠点にするにはちよつと贅沢かな？ と思うくらいだ。

さあ、部屋に入ろう、とドアノブをひね

ようとしたら、勝手にドアが開いた。

「あら、レン達のお部屋に何か用？」

「なっ！？」「」

中から出て来たのは私と同じくらいの歳の女の子。紫色の髪を肩まで伸ばし、えーっとなんて言うんだっけ。ご、ごす……ゴスドリ？

【マスター、ゴシックロリータ、通称ゴスロリです……】

そうそう！ ゴスロリゴスロリ。そのゴスロリっていうドレスみたいな服を来た娘だった。

「あ、あれ？ ちよ、ちよつと、アンタ誰だい！？ ここって確か空き部屋だったはずじゃ……」

「この部屋？ ああ、それならちよつと今朝方引っ越して来たの」

「んなっ……！」

アルフが驚きで口が閉じなくなってる……。私もそうなりそうだよ……。

と、とにかく……。こうなったら別の部屋を探すしか……。

「ん？　なんだレン。誰か来てるのか？」

と、レンと呼ばれた（自分でもレンって言ってたけど）娘の後ろから出て来たのは男の人。少なくとも私よりは年上で、えーっと……一四、五、六歳くらい？　かなあ。アッシュブロンドの髪と、紫色の目。コート、なのか分からないけど、膝まである上着を着た、確実にカッコいい人の部類に入る男性だった。

「なんか、用があつたみたいよ？」

「なら立ち話もなんだろう。中に入ると良い」

「え、いや、あの……」

「アタシ達はそう言う訳じゃなくってだねえ……」

「ちょうど家主がいなくて暇だったの、ほらほら、早く入って入って」

「いやいや、ちょっとまつ！？」

そういつて私とアルフはレンに引つ張られて部屋に引きずり込まれた。

ああ……母さん、これからどうなるんでしょう……。

side out

刹那 side

アニメではフェイト達が拠点にしていた部屋は、私が先日買わせてもらった。とりあえず無印が終わったら売り出しちゃうけど。

ガチャリ、と私は件の部屋のドアを開けて中に入る。

「ただいま……」

見ると、見慣れない靴が二足置いてあった。なるほど、来てるのか。

リビングの方に行くと、案の定金髪の女の子と、オレンジ色の髪をした女性がいた。

「ああ刹那、帰ったか」

「お客さん……？」

「そう、フェイトとアルフよ」

……なんか二人が苦笑いしてる。招きかたが強引だったりしたんだろうか。

「いらつしやい……」

「あ、どうも」

「お、お邪魔してるよ……」

……もの凄い元気がないんだけど……。

し、仕方ない。とりあえず何かで気を紛らわせてあげよう。

「レーヴェ、夕飯作るから手伝って。レンはお茶出してあげて……」
「分かった。君たちも食べて行くと良い。この部屋に用があったのは君たちの邪魔をしてしまったお詫びだ」

「え……いや、でもご迷惑ですから……（クーー……）……」

「お腹は正直ね、刹那、レーヴェ、美味しいの作ってよね？」

「分かっている」

「ん……」

そうして、私とレーヴェはキッチンに向かった。

ふと見ると、ちゃんとレンはお茶を出しているようだ。うん、偉い偉い。

さて、今日のメニューはオムライスです。世間で一応有名なあのタンポポオムライスを実現させてみました。

オムレツを割ると、中からとろっとろの卵が出て来て、それを広げてチキンライスを覆う。そして最後に私特製ケチャップをかければ――。

うむ。完璧。

「じゃあ……いただきます……」

「……いただきます……」

みんなで一斉にオムレツを割りににかかる。フェイトとアルフは私たちのやり方を見よう見まねでやっているようだ。すると、

「お、おおおおおおおおお！　す、凄いじゃないこれ！！」

「うわ……美味しい……」

「当然よ、刹那とレーヴェが作ったんだから！」

「だが、オムレツの方は俺じゃ出来ないから、刹那の方が功績は大きいんじゃないか？」

「……チキンライスも絶品」

「そうそう、レーヴェが料理出来るって知った時はちょっとびっくりしたけど、ま、さすがよねー」

「がっがつ！　がっがつがつ！」

「あ、アルフ……もう少し落ち着いて食べなよ……」

「こんな美味いもん落ち着いて食える訳あるかい！　がっがつ！」

「オムレツの方はさすがに作らなきゃだが、チキンライスの方はまだおかわりがあるぞ？」

「本当かい！？　いいやつたあっ！！　がっがつがつ！」

「というか、オムライス食べるときってがっがつ！　っていう音したっけ？」

さて、夕飯が終わってしばらくした頃。もう外は暗い。

「……今日は泊まっていった方が良さそう」

「え？　でもご飯までごちそうになったのに悪いよ。それに、ちょっと用事もあるし……」

「じゃあ、家まで送るか？」

「あー、いや。今日はこの部屋に住むつもりで来たんだけど、アンタ達がいたからねえ。野宿だね」

「……とにかく、こう言ってみると良い。《結社》の協力はいらないか、って」

「《結社》……？」

「彼女に言ってみれば分かるだろう。連絡を取ってみろ」

「……分かりました」

渋々、と言った感じで黙る。プレシアと連絡を取っているんだろ
う。

それにしても、フェイト達は知らないんだあ、《結社》の事。ち
よつと残念。プレシアの頼み事我が仮聞いているんだし、知ってると思って
たけど。まあ、その程度じゃ知れはしないか。

「えっ！？ で、でも、良いの？」

なんか驚いてるな……。そんなに予想外だったのか。
と、それから少しして、フェイトが口を開く。

「……協力しろ、との事です。あと、その内会わせてくれとも」

「……分かった」

「そりゃそうよねえ。プレシアが私達を知らなかったら逆にびっく
りだわ」

「アンタ達……何ものなんだい？」

「俺達か？ 俺達は——」

「……ただの《結社》……だよ」

第六話「今回の仕事はレンの出番無し！ byレン」

さて。まず昨夜からお昼頃までの感想を言おうか。

フェイトめっちゃ可愛いっ！！

もはやそれくらいしか出てこないよ……。アニメとかで見るフェイトもよかったけど、リアルで見るフェイトももの凄く良い！なにあの生物！ お持ち帰りして良いですかっ！？ あ、いるの私の家二号だった。

……こほん。まあそんな戯れ言はさておき。

フェイト達と私達は今、背中の中ネコ号に來ています。

え？ 見せて良いのかって？ 良いの良いの。絶対に誰にも言わないでね、お母さんにも、って言ったから。まあその内プレシアも知る事になるだろうから大丈夫、とも付け加えたけど。

で、今いるのがシュミレーション室。私が部屋の外で傍観する中、フェイトとアルフは模擬戦中。ジュエルシード探しはブリッジのリトバスマンバーに任せて、こちらはフェイト達にとつたらお手並み拝見、私達に取つたらフェイト達の訓練をしている訳。

ちなみに、フェイトの相手はヨシユア、アルフの相手はエステルがやっています。

フェイトside

「はああああああああッ！！」

これで何回目だろうか。この人と鏢迫り合っているのは。

刹那達が次元航空艦を持っているって聞いた時はもの凄く驚いた

けど、こんな部屋があつてまさか模擬戦する事になるとは思わなかった。

とはいえ、私はさほど緊張していなかった。……どうも侮っていたらしい。彼女たち《結社》を。

私の相手、ヨシユアさんはかなり速い。私と同等、もしくはそれ以上に。

いや、正直言えばかなりスピードは落とされているんだろう。いくら私でも分かる、この人はあえて私よりもワンランク下のスピードで挑んで来ている。

それでも——まだ勝てない。

「くっ……！」

「ソウルブラー……！」

彼がそう叫ぶと同時に、黒い波動が私を目掛けて飛んでくる。

どうも私たちの魔法とはちよつと違ったものも使ってくるらしい事は模擬戦を初めて四、五分くらいで気がついていた。

私はそれを躲し、最大速度でヨシユアさんの背後に回ってアークセイバーを振り下ろす。

「甘いよフェイト！」

が、ヨシユアさんはそれを予想していたかのようにすぐに振り向いて彼の双剣型デバイス、行雲流水。通称『フロークラウド』で受け止める。

「魔眼……！」

瞬間、バリバリバリ！ と、私に電撃のような物が走り、後方へと吹き飛ばされた。それだけじゃない。

「か、身体が……動かない……？」

「魔眼は相手の動きを阻害するからね。残念だけど——君の負けだ」

「……………いや」

まだだ。まだこの程度なら……。

「まだ負けてませんッ……！」

私は全力で身体を動かし、起き上がった。

「なっ……！」

さすがのヨシユアさんも驚いている。その隙、逃さないっ！！
思いきりアークセイバーをヨシユアさんの首目掛けて振るう！
が、

「！！ いない！？ ツ！」

「せいっ！！」

ガッキン！！ と、バルディッシュとフロークラウドがぶつかりあう。

「なるほど…… 君の相棒のバルディッシュがギリギリで防御魔法を発動して大半を防いだ訳だね。良いコンビだよ、ちゃんとフォローしあえてる」

「ありがとう……ごきますっ……！」

……どうも

「ははっ、どういたしまして。……さて、と。じゃあ今度は僕がコンビとしての力、見せてあげないかね！！ フロー！」

了解です、マスター！

私とヨシユアさんの模擬戦は、まだまだ続くようだ。

side out

アルフside

この女……メチャクチャ強いじゃないか！！

最初は甘そうな女だねえ、なんて思ってたアタシをぶん殴ってやりたいねッ！ 性格上はとんだお人好しみただけど、戦いに関しちゃ一人前だよ！！

この女……エステルとか言ったかい。こいつが使ってるのは棒術。

デバイスの名前は確か……『スフィアソレイユ』、だったかい？
ったく！ 厄介な相手と模擬戦させてくれるよ！ リーチが全然違
うじゃないか！

フェイトもフェイトで結構苦戦してるみたいだし……。

しかもこれでまだまだ手加減してると来た！ 《結社》ってのは
本当に何者なんだい！？

「アルフ！ 集中切らすと倒しちゃうわよ！」

「はっ！ 誰が倒されるかつての……！」

アタシとした事が無駄な思考しちまったねえ。それだけこのエス
テルが強いつて訳か。はっ、上等じゃないかい。手加減なんてした
ことを後悔させてやるっ……！！

「おおおりゃああああああああああ……！」

「せえいッ……！」

エステルのスフィアソレイユを正面から受け止めてたんじゃダメ
だ。結構な連激で速いくせして一撃一撃がかなり重い。まだ手加減
して来てるから良いものの、三発も連続でくらったら確実に終わり
だ。本気だったら——今のアタシじゃ、確実に一撃で終わられる。

だから……あんまり得意じゃないけど、受け流す！

エステルが縦に、横に、斜めに振るってくるスフィアソレイユを
何とか受け流しながら懐に入る隙を探す。つつつても、ぜんっぜん
見つからないんだけどねえ！

だ………ッ！ こうなったら突っ込んでやる……！！

エステルの攻撃を流しながら、一瞬、ほんの一瞬だけでも無理
矢理懐への道を作りにかかる……けどダメだ！ 一回流して前に進
もうとしてもエステルが一步下がってきやがる！

「ファイアボルト！」

熱ッ……？

「狼に火とは良い度胸じゃないか……！」

ぜっつったいギャフンと言わせてやる……！！

＊ ＊ ＊

模擬戦が終わってブリッジに戻ってくると――え？ 勝敗？ フェイトは負けて、アルフは……時間切^{発見}れまで粘ったから引き分け。とにかく、ジュエルシードが見つかった。場所は……原作通り月村邸だ。

「月村邸、か……。ごめんレーヴェ、フェイトと一緒に行って来て」「分かった」

「……？ 刹那は行かないのかい？」

「あの家には刹那くんの知り合いがいるから正体は隠さなきゃならない。それに、結局はそのためにユニゾンするのだから、あまり関係ないんだよ。能力値の差程度の問題しかないしね」

「……来^{くる}ヶ谷^{がや}さんの通り」

なるほどねえ、とアルフが納得したように呟く。まあ、ユニゾンしなくても変装、というか素顔を隠す事くらい出来るんだけどね。でも来ヶ谷さんが言った通りユニゾンしたって仕様がな^いんだよねー。どうせレーヴェに任せるし。一人で行く気もないし。いやフェイトがいるけど。

「じゃあ……アルフ、いつてくるね。えと、皆さんも……いつてきます」

「フェイト、気をつけるんだよ」

「うん」

言って、レーヴェとフェイトは空間直結型^{フォールドボソン}ジャンプ装置の中に入る。名称はかなり適当。

これは名前の通り、空間と空間をつなげて転移する。まあ、正確にはどこでもドアみたいな感じなんだけど、違^{ちが}うのは世界間すら無視した一種の瞬間移動だって事。

イメージした場所を座標化し、手首に付けたフォールドボソン遠

隔発生指示装置を経由して、本体、つまり背中の中ネコ号にあるこれで発生指示の起きた所と座標化された場所を繋げてそこにジャンプする……ってこういうことらしい。これが一秒かかるか、かからないか行われる。

……私が作った訳じゃないから詳しく分からないけど、そんな感じの装置。

あ、ちなみにここから飛ぶ時は背中の中ネコ号で座標を打つ。

「わふー、ざひょーいずつきむらてー！」

……クドが座標係というのは非常に気になるなあ……。ちゃんと出来てるから文句言えないけど……。

さて。どうなるのかな……。

* * *

レーヴ E s i d e

俺とフェイトは月村邸付近にジャンプして来た。能美クドリヤフカがちゃんと人がいない事を確認してくれたおかげで、誰にもバレル事はない。

「フェイト、あれ……か……」

「……ネコ？」

「……でかい、な……」

な、なんなんだあのネコは……。あのネコがジュエルシードを使ったのか？ 巨大化したいとでも願ったのだろうか……。

と、そんな事を思っていると、結界が張られた。

視線を移すと、フェレット(?)と、茶色い髪をしてツインテールの少女が、ネコに向かって走っていく姿があった。

「俺はあの少女をやる。フェイトはジュエルシードの確保を。……」

なるべく痛くしないでやれよ？」

「分かった。気をつけてね」

「大丈夫だ。剣帝の名は伊達じゃない」

さて……バリアジャケットを着たか。小さき魔導師……じゃフェイトもだから、白き魔導師か。

全く……刹那やレン、ティータ・ラッセルもだが、子供が戦わなくてはならない自体になるとはな……。大人が不甲斐ない、という事か……。

いや、今は物思いに耽^{ふけ}るのはやめよう。俺は《結社》フェンリルの執行者No.？、《剣帝》レオンハルト。そして今は任務中だ。あの白き魔導師への怪我はなるべく最小限に止める。それで今は十分だ。

この思考約0.98秒。

「……行くか」

呟くと同時、フォールドボソンを使用して白き魔導師達の目の前へとジャンプする。

……さあ、始めようか。

side out

なのはside

すずかちゃんの家に遊びに来ていた日、なんとジュエルシールドが！
なので反応のある場所に行ってみると……。

「……大きいね」

「……た、多分、あのネコの大きくなりたいてって願いが正しく叶ったんだと……」

「……と、とにかく！ 早くジュエルシールドを封印しなくちゃ！
レイジングハート！」

分かりました、マスター

「よし、ジュエルシー——」

「させん」

「ッ！！　なのは！」

そんなユーノくんの大声と同時に、ユーノくんが私の前に出て障壁を張ると、何かが思いきりぶつかりました。

「ほう？　さほど本気ではないとは言え、俺の一撃を抑えるか。：

…面白い……っ！」

「くっ……うわあ！！」

でもそれもほんの一瞬。ぶつかってきた人が少し力をいれてもう一度攻撃してくると、ユーノくんの障壁は一撃で壊されちゃった。

「ユーノくん！！　くっ……」

私は後ろに下がり、

「デイベインシュー——」

「させんと言っている。零ストーム！！」

「ふえ？　きゃあっ！！？」

その人が叫ぶと同時に、その人が持っている剣からタツマキみたいな風がなのはに向かって飛んできました。そのせいか分からないんだけど、デイベインシューターがふっと消えます。

「小さい白き魔導師よ。諦める、貴様では俺には勝てん」

そう言ったその人は——その男の人は、私を見下ろしながらそう言いました。

……分かる。私は多分、この男の人には勝てない。

でも——諦めるわけにはいかない！

私の周りにスフィアを五個生成し、男の人に発射します！

「……　AAキャンセラー」

男の人がその腕を空に向けてあげると、掌から紅い光が飛び出し、それがデイベインシューターに当たりました。瞬間、デイベインシ

ユーターが消滅しちゃった……。

「ふっ……！」

と、男の人が言うのと同時に、私の意識は薄れていった……。

side out

フェイトside

ジュエルシードを封印する傍ら、横目でレーヴェと白い娘の戦闘を見ていたけど……。

凄い。その一言に尽きる。

全く相手の攻撃を許さず（というか消してた）、圧倒的な力量差を見せつけた。多分だけど……今の私じゃまだまだ勝てない。

でも……いつかは……。

「レーヴェ、終わったよ」

「分かった。なら帰ろう」

母さん。私はもっと、強くなります。

第七話「近況報告……短いけど b y フェイト」(前書き)

珍しく一ヶ月かかった……。ワルクラもまだ執筆途中だし……。ダメだ、最近……。

スランプ、って訳じゃないけどね。

第七話「近況報告……短いけど byフェイト」

フェイトSide

最近の日課はこうだ。

朝起きて刹那の作る朝ご飯をみんなで食べる。

みんなと一口に言っても、刹那は基本いつもいるけど、レンとレ
ーヴェは毎回じゃない。というより毎回人が変わる。エステルさん
とヨシユアさんの時もあるしティオとエリイさんの時もあった。ま
あとにかく、《結社》のみんなが毎日交代でここに朝ご飯を食べに
くる訳だ。

ちなみに、いつも二人一組でペアはよく変わったりする。この前
はロイドさんとレンで来ていた。仲が良い、って聞いた時はちょっ
とびっくりしてしまった。同じ《結社》のメンバーなんだから当然
なのにな。

さて、朝ご飯を食べ終わると、お昼頃までのんびりしてから昼食
を食べて背中の中ネコ号に行く。

本当はジュエルシード探しをしたいんだけど……見つけるまで遊
んでなさい、と《結社》のみんなに怒られてしまった。子供のくせ
に働き過ぎだって。別にそうでもないと思うんだけどなあ。

まあそんな感じなので、ティオやレン、ティータやヨナ達とゲー
ムして遊んだりする。合間にシュミレーションルームを使って模擬
戦をやってもらう事もあるかな。

正直、《結社》のみんなは強い。全員がSランク魔導師だってい
うのを抜きにしてもかなり強い。私なんてまだまだだ。いつも手加
減してもらってる。あのティオやレン、ティータだって私より強い。
ヨナは……インターネットが強い。

そつえば、みんなのデバイスは元々使っていた武器、この場合
は質量兵器なのかな？ を完全再現した物らしくって、重さとか握

り心地とかが一寸の狂いもなく同じらしい。と、いうことは、思
つてアガットさんのじゅ、じゅ、じゅーけん？ を本気でお願いし
て触らせてもらった。

はつきり言おう。

——あんな物を振り回せるアガットさんは人間じゃない。

いや、一応アガットさんを含める刹那とブリッジ、防衛班のみんな
意外はユニゾンデバイスっていうのらしいから細かいことを言っ
てしまうと人ではないのだけれど……でも何故か人間。

い、言ってる意味が分からないと思うけど私もよく分からなかつ
た。

えっと……なんかみんなのユニゾンデバイスとしての力は希少能
力キルみたいな物らしい。

だから実は食べ過ぎればちゃんと太るし、鍛えれば筋肉も付く。
生殖機能もちゃんとあるらしく、子供も産めるらしい。でもその事
を知ったのは本当に最近みたい。みんなのリーダーである刹那です
ら知らなかったんだから相当びっくりしたに違いない。

えと、話がずれたね。

とにかく。じゅーけん、漢字だと……重剣？ を振り回せるアガ
ットさんは人じゃないと思う。魔力で強化してるならまだしも、何
の強化も無しで自由自在に振り回すのだ。……私じゃ柄を持ち上げ
るのがやっとで、剣身は一ミクロンも上がらなかったのに……。

ていうか両手使ってる時もあるけど、片手で振り回す時もあるも
んだから本当にびっくりする。

……でも、もっとびっくりしたのは模擬戦した時なんだよね……。
もの凄い雄叫びをあげながらこっちに突っ込んでくるその様を目
の前で見ると……うう………恐かった。ティータはよくあんな恐い
人と一緒にいれるなあ。いや、本当は優しい、っていうのは分かる
んだけどね？

ていうか、

『ケンカは気合いだッ！ ゴチャゴチャ考えてねえで突っ込め！』

なんて言われた時はびっくりした。ケンカは気合いつて……ケンカじゃないんだけど……。

さて、習慣の話に戻ろう。

と、言っても遊んだり模擬戦したりした後は、ジュエルシードが見つからない限り基本食堂でご飯食べてお風呂は言って歯を磨いて寝る。こんな感じだ。

正直言つて、もの凄く充実してる。んだけど……。

うーん……母さんが待ってるのに、こんな生活で良いのかなあ……。

S i d e o u t

第七話「近況報告……短いけど byフェイト」（後書き）

と、いうただの時間稼ぎだぞ、と。

すいません、何だか「プロット書いてないから仕様がないうね！」
っていう言い訳使いたくなるほどにネタもストーリーの流れも思い
つかない物で……。

さすがにこれ以上どっちも更新しないのはキツいだろ、というこ
とで、なのはだけでも更新してみました。……短いけど。

近いうち……になるといいけど、ワルクラも頑張って更新します
！！

特別話その1「背中のネコ園」とある日常」(前書き)

遅くなりました……。

キャラ崩壊している人も若干いますが……どうか勘弁してください。

特別話その1「背中のネコ園のとある日常」

ここは……執行者N o , 1 漆黒魔術師 ノワール（勝手に周りがつけた）、本名『翡翠刹那』率いる 結社 フェンリルの様々な理由から、最近虚数空間にありとあらゆる技術で作られた本拠地。“背中のネコ園”。本当はもっとカッコいい名前になるはずだったが、とある生意気なナヨナヨ少年「誰がナヨナヨ少年だ！！」が、名前を決めるとき、

『戦艦が背中のネコ号なんだからさー、背中のネコ園でいいじゃん。面倒だし』

などと言ってしまったがためにこんな名前になってしまった。まあ、気にしている人物は誰一人としていないのだが。

さて、これはそんな背中のネコ園でのとある日常生活である。

* * *

「ああ……冒険……ぼーけん……ぼーけん……ボーケン……B O
U K E N……ぼーう・けー・んんんんん……ッッッッッ……」

背中のネコ園のとある食堂で叫んでいる炎のように赤い赤毛を持つ青年、アドル・クリSTEIN。いつもなら生気に満ち、爽やかに笑っているのだが、今ではまるで狂人のようなオーラを出しながらぶつぶつと何か言っていた。

「お、おいアドル……気持ち分かるけどよお。迂闊にどつか冒険してたら管理局連中が……」

「管理局がなんだって言うんだッ！！ あんな連中が恐くて冒険な

んか出来ないッ！！　そもそもあんなクズ共よりも恐い奴と今まで戦って来たじゃないか！　良いかいドギ、僕の冒険魂を止められる物は誰も！　いや、刹那以外にはいないんだよッッ！！」

「その刹那に止められてるから行かれないんだったなあ」

「クッ……もう……もうダメなんだ……！　僕の冒険魂が荒れ狂い僕のなかで暴れ回っているんだよ……ッ！　これ以上押さえつける事は出来ないんだ！！」

「びみよーに廚二的に聞こえなくもないんだが……頑張ってくれよアドル。刹那だって言ってただろ？　もうじき管理局なんざ気にしないで冒険出来るようになるからガンバってくれって」

「それからもう何日経っているんだい！！　もう一日もたつたじゃないか！！」

「まだ一日しか経ってないだろ！？」

「今僕にとつては二四時間ですら一〇年にも感じるんだ！！」

「重傷過ぎんだろ！！？」

アドルの冒険好きは誰よりも知っているドギだったが、さすがにここまでとは思わず軽く引いてしまった。……というよりも、いわゆる禁断症状みたいなものがここまでとは思わなかったと言つべきか。

アドルは普段しない貧乏揺すりをしながら血走った目をしつつ、またぶつぶつと冒険冒険、と呟き出した。正直言つて不気味である。ガタリ、と隣の席に生意気王女が座った。

「誰が生意気王女よ……。ねえドギ、なんかまた悪化してない？　段々恐くなって来たんだけど……」

「少なくとも二四時間を一〇年に感じるくらいには悪化してるよ」「メチャクチャ悪化してるじゃない！！」

生意気王女、アイシヤは目の前に置いたラーメンにレンゲを浸しながら言った。何故だか知らないが、アイシヤはここに来てからいるんな物を食べている。そのせいか最近体重が怪しくなってきたののだが……まあその辺は今の所誰にも知られていない。

ため息を一つつき、ラーメンのスープを一口飲んでから麺をすす
る。ズルズルズルッ、といい音を立て、一滴の麺に絡まったスー
プが弾かれるように飛ぶ。

「ん〜」 このラーメンって言うのも美味しいわねー。別世界の料
理ってどんな物かと思ってたんだけど、どれも美味しくて良いわ
ねー。つい一杯食べちゃうわ」

「それで最近体重がどのとか言ってたバカ王女はこのどいつだ
？」

続いてアイシャの向かいに黒いマントと何故かハルバードを持っ
ている青年、ガツシュが座った。

「ちよ、ちよつとガツシュ！！ 女性にそういうのはデリカシーが
なさ過ぎるわよ！！？」

「うっせ、本当の事なんだから良いじゃねーか」

「よくないわよ！！」

「つたく、こまけー事をぐちぐちと……これだからバカ王女は」

「誰がバカ王女よ執行者No.29 生意氣傭兵 ガツシュ君！？」

「てめえ……それで俺を呼ぶんじゃねえ！！ あいつが付けたから
認めてやつただけで呼ばれてえわけじゃねえんだよ執行者No.3

0 生意氣王女 ！！」

「ちよつ……アンタこそそれで呼ばないでよ！！」

「テメエが先に呼んで来たんだろぅが！」

「アンタが先に喧嘩売って来たんでしょ！？」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……！！」

「お前らなあ……アドルはこんなだけど、こいつもオレも一応飯食
つてんだぞ？ ケンカすんならよそでやってくれよ」

「ドギ（筋肉達磨）は黙ってて（黙ってる）！！」

「……なんでオレが怒られてんだ？」

壁をぶち壊す非常識人も、今回ばかりは、常識人であった。

場所が変わってツインテール遊撃手と、プレイヤー女装したら姉に似ている遊撃手、エステルとヨシユアの部屋。

そこには、エステルとヨシュアは当然ながら、今はエリイとクローゼにシエラザード、そして何故かアガットとティータがいた。

七人は適当に雑談しながら食堂から貰つて来たご飯を食べていたが、

「ところで、エステルとヨシュアはともかく、アガットとティータはいつ結婚すんのよ？」

「ブー————ツ！！？」

「ひやあ!？」

「アガツト汚いわよ……」

「いや、まあアガツトさんの気持ちは分かりますけど……」

「ふう……スパゲティにかからなくて良かった」

上からクローゼ、エステル、ヨシユアにエリイの順に言った。

「テムエシエラザード！！突然なに言ってるやがる！」

「はわわ……私とアガツトさんがけけ、結婚!？」

「だっていつも恋人みたいな感じじゃないアンタ達。ラヴラヴいちゃいちゃと……。あ、ラ『ブ』の『ヴ』重要よ?」

「どうでもいいわ！別に恋人みたいな事なんざしてねえだろ！！」

「あれ、自覚なかった訳？」

「まあアガツたしねえ。でもま、もう手遅れじゃない？ だって

既に影ではロリコンって言われちゃってる訳だし？」

「ちよつ、ちよちよちよつと待てえッ!!!? 何だそれは!」

「……エステル、そういう事実は言わないであげるのが優しさだよ」

「えー、でも本当の事じゃん」

「まあ……僕も聞いた事はあるけど……」

「ヨシュアーーーーー!!! テメエ嘘でも良いからそこは否定し

るよおおおおおおお!!」

号泣だった。もはやアガットですら号泣だった。

ちなみに、ティータはまだ顔を赤くしながら「えへへ……アガットさんと結婚……」とかやっている。

と、そんなアガットに飽きたのか今度はエリイに向かつて、
「で、エリイちゃんはロイドとどうなのよ？ あいつ結構鈍いでしょ？」

「いや、まあ……。天然のたらしですから……」

「あれは……酷いですよね。ヨシユアさんとある意味同類です」

「ちょ、ちよつと待ってクローゼ。それは聞き捨てならないんだけど……」

「あー、そういえば恋人同士になる前は言われなきや全然気付かなかったんだけど、ティオ……あ、特務支援課のティオちゃんじゃなくって、私の親友の方ね。そのティオから聞いたんだけどさ、ヨシユアってやつぱりモテるのねー。私が恋人になって尚まだ好きな子いたもん」

「ま……マジ？」

「マジよ。奪い取ろうなんて娘もいるんだから。まあそういう危ない芽は潰し……コホン、説得して諦めてもらったけど」

「今潰したって言うおうとしたってどうかほとんど言ったよね!？」

「ちよつと、エステル!？」

「ヨシユアさん……女の子には、殺らなきゃいけない時があるんです……」

「今確実に『やる』の文字が違ったよねえ!!？ 何!？ クローゼも同じような事してるの!？」

「もう……良いじゃないその話は。今はロイドの話でしょー。ヨシユアも気にするわねえ」

「だってシエラさん……ああもう良いです……」

ヨシユアはため息をついて俯いた。

そんなヨシユアを無視して、話は続く。

「で、どこまで話したっけ？」

「ロイドが天然のたらしだつてどこまでです」

「ああそうそう。で、今どのくらいのライバルがいる訳？」

「そうですねえ……、としばらく考え込むと、

「確實っぽいのがテイオちゃん、怪しいのがリーシャさん……つて所ですね。私が気付ける範囲だと」

「あー、あのアルカンシエルの娘ね。確かに微妙って感じ。あの娘がライバルになるかならないかは今後のロイド次第つてところかしら」

「……落とされる可能性はかなり高そうな気はしますけど。早めに決着付けた方が良くないかなあ……」

「そうよ、勇気を出して告白しちゃえばいいんだよ！」

「うう……でもやっぱり恥ずかしいのよね……」

「まあ頑張りなさいな。きっと最終的には告白しなきゃいけないような状況になるわよ」

「エステルみたいにその場の勢いでつい言っちゃう、なんて事もあるかもね」

「ああ、やっぱりエステルつてそうだったのねー。お姉さん納得。ああ、ところでいい加減アンタ達二人はキスの先まで言った訳？」

「「突然過ぎるー!!」」

外はどうでも、ここは平和でした。

特別話その1「背中のネコ園のとある日常」(後書き)

はい、前回と同じく時間稼ぎです。

まあ一応本編は書き途中なんですけどね……。本当最近読む方専門になりかけてきてるよ……。

今回は……多分イス勢初登場、だと思います。アドルが冒険出来ずにずっと過ごしたらどうなるのかなーって思ってたやってみました。イスVS空の軌跡の勝利時の台詞に、「冒険は僕の全てなんです」とか何とか言ってたから、長期間冒険出来なかったらこんな感じになったりして、みたいなノリでした。

ガッシュとアイシャはなんだかんだでお似合いですよね！

あと一つアンケートみたいな事をしたいです。

……執行者の二つ名を考えてください！ 御願います！！
元執行者のレンとかレーヴェとかヴァルターとかその他二、三人はそのままで行くんですけど、他の人達本当に人数多くて……。まあ全員は出さないでしょうけど……基本的に気分が出る人が決まるんです。

あ、でも出来れば一人多くても二、三人で御願います。いっぱいいても被っちゃってどっちにしようか決められなさそうなので……。

まあとにかく。気が向いたらで良いので、お願いします！

執行者リスト

- No 1 《漆黑魔術師》ノワール（翡翠刹那）
- No 2 《剣帝》レオンハルト
- No 3 《太陽の守護者》ヨシユア
- No 4 《極光の太陽》エステル
- No 5 《姫騎士》クローゼ
- No 6 《幻惑の鈴》ルシオラ
- No 7 《重剣》アガット
- No 8 《痩せ狼》ヴァルター
- No 9 《不動》ジン
- No 10 《怪盗紳士》ブルブラン
- No 11 《愛の狩人》オリビエ
- No 12 《銀閃》シェラザード
- No 13 《可愛い正義》アネラス

- No 14 《タマネギ剣士》リシャル
- No 15 《殲滅天使》レン
- No 16 《愛しさ100%》ティータ
- No 17 《不良神父》ケビン
- No 18 《聖杯騎士》リース
- No 19 《蒼騎士》ユリア
- No 20 《皇子の子守り》ミユラー
- No 21 《飛脚》ジョゼット
- No 22 《熱血捜査官》ロイド
- No 23 《お嬢様捜査官》エリイ
- No 24 《猫愛好家》ティオ
- No 25 《女好き警備隊》ランディ
- No 26 《月影》銀
- No 27 《太陽の親父》カシウス
- No 28 《がきんちょハッカー》ヨナ

- No. (仮) 《ヒマワリ笑顔》 キーア
- No. 29 《生意気傭兵》 ガッシュ
- No. 30 《生意気王女》 アイシャ
- No. 31 《赤毛冒険家》 アドル
- No. 32 《壁壊し》 ドギ
- No. 33 《森の狩人》 エルク
- No. 34 《怪力女》 クルシエ
- No. 35 《風音の読み手》 マイシエラ
- No. 36 《勇気の剣継承者》 チェスター
- No. 37 《棗兄》 恭介
- No. 38 《棗妹》 鈴
- No. 39 《普通の少年》 理樹
- No. 40 《筋肉馬鹿一直線》 真人
- No. 41 《真人のライバル》 謙吾
- No. 42 《メルヘン少女》 小毬

No 43 《騒がし乙女》 葉留佳

No 44 《えきぞちつく（自称）なマスコット》 クドリヤフカ

No 45 《姉御》 唯湖

No 46 《N・Y・P》 美魚

No 47 《女王猫》 佐々美

No 48 《姉バカ一直線》 佳奈多

No 49 《ボケまくりの完全無敵少女》 沙耶

No 50 《ジャンク屋》 ロウ

No 51 《静かなる傭兵》 ガイ

No 52 《傭兵A》 イライジャ

No 53 《部隊の紅一点》 ロレッタ

執行者リスト（後書き）

執行者ってこんなにいたんだ……。ちなみにカシウスさんは最後に思い出しましたw

ぶっちゃけジョゼットはあまり好きじゃないから入れんのやめようかなー、とか思ってしまった訳だけど、なんかジョゼットファンな方々に怒られそうな気がするからやめました。

特務支援課とイース勢とサーペントテールの二つ名は結構適当。

キアの（仮）は、別に執行者ではないので、って事で、仮にさせてもらいました。

二つ名提供をしてくれたハルさん、どうもありがとうございます。いくつか使わせていただきました。エステルのはキアにまわした上にカタカナにしちゃいましたけど……。

これからよろしく御願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008s/>

魔法少女リリカルなのは Setsuna's Story

2011年11月12日11時44分発行